第 108 号　2018 年 3 月 15 日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

2018 年 3 月 11 日で、東日本大震災から丸 7 年が経過しました。震災発生当時の記憶は、薄れていく部分もありますが、1 万 8,000 人以上の死者・行方不明者（震災関連死を含めると、2 万人以上)、12 万戸以上の建物が全壊という大きな被害が出たことを忘れず、これから起こりうる災害に、この経験を活かさなければならないと改めて思います。

今回は、2 月に行われた第 32 回全ベース会議・第 45 回仙台教区サポート会議、八木山オリーブの会が催した落語会と石巻ベースで行われた東北ユースオーケストラの演奏会をご紹介します。落語会と演奏会では、学生の皆さんが活躍してくださり、被災された方々が若者から元気と笑顔をもらったようです。

第 32 回全ベース会議・第 45 回仙台教区サポート会議

仙台教区サポートセンター　濱山麻子　長谷川昌子

2 月 16 日、カトリック元寺小路教会で、第 32 回全ベース会議と第 45 回仙台教区サポート会議が行われました。岩手・宮城・福島のカリタスベース、カトリック東京ボランティアセンター（CTVC)、カリタスジャパン､東北被災地支援担当の司教､中央協議会復興支援室､仙台教区サポートセンター（SDSC）から 30 名の出席があり、各ベースからの報告と、この 3 月で閉所する大槌ベースといわきサポートステーション「もみの木」の活動の振り返りが行われました。

各ベースからの報告では、仮設住宅の集約にともない、仮設での活動の規模が縮小し、同時に災害復興公営住宅での支援が求められていることが多く上がっていました。

全ベース会議の様子

岩手県の宮古ベースでは宮古市内の仮設住宅への訪問を終了し、今後は月に 1 回、宮古教会で集会を行うこと、また、2016 年の水害の被災地である山田町と岩泉町の仮設住宅への訪問は継続するということです。

カリタス釜石では、ベース内で開いているサロン、「ふぃりあ」で住民の作品展を開き、仮設住宅から災害公営住宅へ転居してバラバラになった住民の同窓会的な出会いの場になったということでした。

大船渡ベースでは市内の仮設の集約が進み、災害公営住宅の自治会から、住民同士の交流の場を作りたいという要請があったこと、買い物難民の支援が今後も求められているということです。

福島県のカリタス南相馬からは、南相馬市小高区の災害ボランティアセンターの活動が終了し、今後は東京電力が復旧工事を行っていくこと、一方で浪江町のボランティアセンターからのニーズは多く、今後も連携を取りながら活動をしていくことが報告されました。

活動の振り返りでは、大槌ベースの片岡英和ベース長が、長崎から車で大槌入りした 2011 年夏から、社協、地域の方々との関わりを作りながら活動を続け、この 3 月でベースを閉所するまでのエピソードを話しました。

また、2014 年からいわきサポートステーション「もみの木」のベース長を務める朝尾光二氏は、発災直後に当時の谷司教が掲げた「仮設住宅がある間は支援活動を続けよう」という目標のもと、避難所への物資や水の配布から始まり、2011 年 11 月に「もみの木」をオープン後は、いわき市内の傾聴ボランティアグループ「みみ」の指導を受けながら、大熊町、楢葉町からの原発避難者との関わりを続けてきたこと、「もみの木」を閉所後も、司教団が支援を続けると表明している 2021 年 3 月までは、さいたま教区サポートセンターが中心となって活動をしていくことを話しました。

様々な苦労もありながら活動を続けてきた両ベースへ、出席者からは惜しみない拍手が贈られました。

午後は､仙台教区サポート会議と別室に分かれ､全ベース会議では､カリタスジャパンが現在作成を進めている「災害対応マニュアル」のために、ベース立ち上げの時期に各ベースで苦労した点、その後の対応について分かち合いました。

災害発生時に支援活動の拠点を設置するにあたり、教会を使うのであれば信徒、および近隣の住民との関係づくりがまずは肝心であること、運営スタッフ、ボランティアのケアが必要であることなど、7 年経った今だからこそ語ることができる、それぞれの体験に基づいた話が続きました。運営側としての立場だけでなく、信徒として、南海トラフ地震をはじめ、今後、発生が予測されている大災害に備え、物資の蓄えや、信徒間のネットワークづくり、活動拠点や避難所として開放する心構えを持つことなど、教会が平時から取り組む必要があることも確認されました。

午後の全ベース会議の様子

一方、仙台教区サポート会議では、オブザーバー3 名を含む 15 名で話し合いが行われました。

まず､2017 年度､復興支援活動がどのように行われたかについて､2 月に行われる司教総会に各教会管区から代表者として出席している委員たちが､前もって準備していた資料をもとに分かち合われました。

また、これまで、日本の司教団が仙台教区が行う復興支援活動を後方支援するということで作られた「東日本大震災復興支援室」が、過去 7 年間を総括し、発表しました。特に初期、中期には、以下のことが挙げられました。

〈初期〉

●仙台教区事務局への事務補完支援

●現地情報を後方に流す広報活動：「仙台教区ニュースレター」開始、初期の 10 号（英語版含む）発行
●長期スタッフの募集、現地派遣調整
●各教区、男女修道会担当者への情報提供、企画調整
●3 管区と SDSC、カリタスジャパンの連携した活動を行うため、また通称「オールジャパン」を繋ぐための場づくりとして「仙台教区サポート会議」を運営し、7 年間で 45 回開催
●3 管区の現地拠点が開始されるまでの側面支援
●福島をめぐる問題のため会議を 2 回開催
〈中期〉
●現地視察の企画、運営：全 6 回実施
●SDSC 事務局への支援

次いで、三教会管区の仙台教区復興支援活動が報告されました。長崎教会管区からは、大槌ベース閉鎖と閉所にあたっての感謝ミサのご案内、今後の支援に関することが話されました。大阪教会管区からは、大船渡ベースと米川ベースの今後について話されました。東京教会管区からは、札幌教区、さいたま教区サポートセンター、カトリック東京ボランティアセンター(CTVC)、カリタス南相馬、仙台司教区に分けて、現状と今後についての報告がなされました。

その報告の中で、カリタス南相馬から特に印象深い言葉がありましたので、ご紹介します。

◆カトリック教会としての宣教ビジョン

原発事故の被害を受けた地域として、福島県、特に浜通りには大きな困難がある。避難指示が次々に解除されても、帰還する人は少ない。理由はいくつもある。放射線量の高さも不安であり、浜通りの 2 つの原発の安全性に対する信頼も失われている（今更、原発の近くに住みたくない）。帰る場所には、学校、病院、商店もほとんどなく、自分が帰ったとしても元のような隣近所もいない。それでも帰ろうとする人々、あるいは帰れない人々がいる。

原発事故の被害を受けた地域の特殊性(数年間住めなかった家に戻る人の困難、戻れない人の抱える困難)と福島に対する分断・差別の問題が今なおある状況でも、もう原発事故は終わったかのように言われ、「自分たちは日本全体から切り離され、見捨てられ、忘れ去られているのではないか」という思いが、被害にあった地域の人々にはある。「そうではない、あなたがたは決して見捨てられ、孤立しているのではない」これがわたしたち教会の伝えたいメッセージである。それを伝えるために、カトリック教会、修道院、カリタス、幼稚園が、この地域に「存在する」ことの意味は大きい。

また、仙台司教区から、現在、「新しい創造」基本計画第 4 期（2016 年 4 月～2019 年 3 月末日）にあるが、この支援活動は 4 期をもって終わるとは考えていない。東日本大震災が起こり、仙台教区の教会は、社会のただ中にある教会を痛感し、地元の人々、特に谷間に置かれた人々に寄り添い、共に歩み続けたいと願っている。との言葉もありました。

会議参加者全員で記念撮影

聖堂で落語が聞けるボランティア

カトリック八木山教会　八木山オリーブの会　野田　和雄

2 月 28 日、八木山オリーブの会は、カトリック亘理教会で落語会を催し、津波被災者と笑顔で交流しました。

落語会のポスターや町内への呼びかけのお陰で、いつもより参加者が多く集まり、久しぶりの再会を喜んでいます。スタッフも含め、40 名以上が集まると、亘理教会の新聖堂も少し狭く感じます。

会場は、祭壇をカーテンで覆い、テーブルで高座を作り、緋毛氈（ひもうせん）の上に、厚手の座布団を置き、芸名付の「めくり」とお囃子のＣＤが流れると、「亘理教会寄席」のできあがりです。６年続いたオリーブの会の落語会なので、設営準備もお手のものです。

出演者は、東北大学落語研究会４人のメンバーで、「粗忽の釘」「時そば」などを熱演しました。若さあふれる声やしぐさが会場を沸かし、観客のお年寄りにも元気が伝わってきます。まぶしい若さと熱意が広がり、笑顔が輝いてゆきます。参加者の拍手や笑い声を、聖堂のマリア像がやさしく見守っているようです。

落語を披露してくれた学生の皆さん

落語が始まるまで、いつものように将棋を楽しむ男性たち

落語が終わると、高座を片づけて、テーブルとイスを並べて、昼ご飯の準備です。学生さんにも手伝ってもらいます。出演者も参加者も同じテーブルにつき、人気者のニコ神父様の「食前の祈り」が済むと、「いただきます！」の元気な声が響きます。

今日の献立は、若者向けの「カツカレー」です。手作りカレーをペロリと食べた出演者には、スパゲティのお代わりが待っていました。台所のマリア様たち（いつの頃からか、オリーブの会では、台所で昼食の準備をしてくださるボランティアさんたちのことを、このように呼ぶようになりました）は大忙しですが、皆さんがおいしそうな笑顔を見せてくださるので満足そうです。

食事の後は、恒例の歌の時間です。仮設住宅をお訪ねしていたときから使っていた「歌集」の中から、リクエストして、思い出深い、あるいは、懐かしい曲をギターの伴奏で歌います。ギター伴奏は鈴木隆さん。慣れた手つきで「春の歌」を演奏しています。

落語で笑い、食事でほほえみ、楽しいおしゃべりと歌でまた笑う。そのたびに、皆さんのお顔がどんどん輝いていきます。

同じ仮設住宅に住んでいたメンバーは、現在、別々の復興公営住宅に移り、それぞれに暮らしているため、皆と会う機会が少なくなっています。そのため、震災前に皆さんが住んでいた荒浜の言葉が飛び交い、なつかしい同級生や友だちと一堂に集まることのできる、このオリーブの会を楽しみにしてくださる人も多いのです。

名残惜しい中、次回３月の約束をして、被災者の方とお別れをしました。学生さんから、「４月のお花見は何日が見頃かな」とスタッフが話していたところ、参加したいとの申し出があり、４月の再会を約束しました。

八木山オリーブの会では、毎回、被災者の方々を見送った後、教会内でスタッフの振り返りをしています。今回、皆さんがおっしゃったことをまとめて申し上げれば、次の言葉になるでしょう。

「被災者の方々は皆さん、とても喜んでいて、よかったと多くの人が感じておられました。そして、これからも続けてほしい、というご意見でした。」

被災者に寄り添う歩みを続けるうちに、亘理教会と八木山教会の教会協働という形が定着しました。これまで多くの人の祈りと支援に支えられたお陰だと感謝しています。

次年度のオリーブの会は、花見、芋煮会、生け花、クリスマス会、落語会といったイベントを予定しております。

今後も、息の長いご支援とお祈りをお願いいたします。

落語の後は、みんなで食事と歌を楽しみました

東北ユースオーケストラ

東北ユースオーケストラ/ｶﾄﾘｯｸ元寺小路教会所属　中村 祐登

東北ユースオーケストラの有志メンバーは、３月３日、宮城県石巻市を訪れました。石巻ベースでミニコンサートを行うためでした。

東北ユースオーケストラは、代表・監督を務める音楽家の坂本龍一さんの呼びかけで結成されたオーケストラで、メンバーは岩手県・宮城県・福島県出身の小学４年生～大学院生です。普段は様々な場所で活動するメンバーが、月に一度定期的に集まり、練習をしています。

３月に行われる定期公演の他、依頼演奏も積極的に引き受け、「東北から新しいオーケストラの形に挑み、音楽の枠をも超えた東北ならではの創造性を世界に発信できたら」と願い活動しています。

有志メンバーによる演奏は、沿岸部出身の団員ばかりでないこのオーケストラが、東北から世界に発信していくためのアイデンティティを見つけるために始まりました。被災した方々に寄り添い、その方々の思いを世界に伝える、そのミッションを持って活動しています。

学生の皆さんの素敵な演奏が、オープンスペースに響き渡りました

この日、コンサート開演前の午前中には、参加団員の希望により石巻市内のスタディツアーを行いました。最初に見たのは、長面（ながつら）地区、そして大川小学校です。同年代の子どもたちのかけがえのない命がここで亡くなったことから、感じることが様々あったようです。次に、湊地区～南浜・門脇地区を車窓から見たあと、日和山から復興途上の石巻の様子を見ることができました。最後に、仮埋葬地だった北鰐山墓地跡を見学しました。今回参加した団員は、下は中学校１年生から上は大学生までの10名。県内でも特に被害の大きかった石巻の実相に向き合いました。時間の制約で伝えたかったことの半分も伝えられませんでしたが、直接目にしたものから何かを感じ取ってくれたらなあと思っています。

石巻ベースは、昨年から演奏させていただいている場所です。来てくださるお客さんとの距離感の近さと、コンサート中の雰囲気が大好きな場所です。今回も選曲には歌謡曲を中心に据え、予想通りのカラオケ大会となりました。オープンスペースの利用者さんが　ラジオ石巻と回覧板で宣伝してくださったそうで、ベーススタッフの方が初めて見るお顔もあったそうです。それだけ期待してくださることにとても嬉しくなり、また昨年のコンサートも大成功だったんだなと感じられました。

終演後のお茶っこでは、コンサートの印象がダイレクトに伝わってくる時間です。「あんね、今年も大きい声で歌えた！」という嬉しい報告もありました。「来年も来てね。」という声を昨年よりもたくさんいただき、あの時間がその場にいた皆にとってとても良い時間だったんだなあと実感しています。

演奏後のお茶っこも、皆さん笑顔で楽しまれていました

最後になりますが、今回のミニコンサートを実現するにあたりお世話になりました、仙台教区サポートセンターの皆様、カリタス石巻ベースの皆様、見えないところでたくさんの準備をしてくださったことと思います。本当にありがとうございました。関わったみんながまたやりたいと思えるコンサートができたこと、とても嬉しく思います。東北ユースオーケストラの団員はこれからも、ぜひ細く長く、関わり続けていきたいと思います。

スタッフやボランティアとともに記念撮影する東北ユースオーケストラの皆さん